
魔法世界の混沌

逸環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界の混沌

【Nコード】

N7191X

【作者名】

逸環

【あらすじ】

多くの人のように、ただ毎日を生きるだけの主人公。

彼が死んだ時に現れた神が与えた能力は、月姫の混沌教授とFat eの鉛色の狂戦士のもので……。

能力が片方マイナーすぎる！

とかの苦情は聞き入れないで、生き汚い主人公が頑張ります！

なんでかなあ？(前書き)

初めて投稿します。

なんでかなあ？

思えば、俺の人生は散々だった。

いや、散々ではない。

無為だったただけだ。

生きているとも言えず、死んでいないだけの毎日。

普通に学校に行つて、普通に部活をやり、普通に帰つて、普通に遊ぶ。

その繰り返し。

え？

勉強しろよつて？

無理無理。

俺の辞書に勉強なんて言葉は載っていない。

今の高校に入れたのも、奇跡が五回くらい起きたからだし、講義なんて睡眠時間になっている。

善人でもないから、道で困っている婆さんを見ても助けないし、目の前で子供がトラックに轢かれそうになつても見ているだけ。

……………そのつもりだったんだがなあ。

なんで、あのガキを助けちまったかなあ？

良心なんて咎めていない。

そんな心は持っていない。

ああ、わかってんよ。そんなデメエが、

「ムカつくからだ。こんちきしょー」

死にたくねえなあ。

「ああ、ムカツク」

何もない、ただ広いだけの空間で呟く。
思い出すことは、生前最後の記憶。

そう。

ガラにもなくトラックに轢かれそうになったガキを助けてしまった
時の記憶だ。

「ああ、ムカツク」

もう何度目かも分からない言葉を呟く。
どれだけ時間が経ったかも分からない。

延々と呟き、うずくまり、呟き、立ち上がり、呟き、横になり、と
りあえず寝る。

その繰り返し。

ここがどういうところかは分かっている。
俺みたいなの、死んでからもまだ馬鹿みたいに生きてがっている連中
を諦めさせるための場だ。

「ああ、ムカつく」

こんな何も無い空間。

寂しくて、狂いたくて、そして死にたくなってくる。

けれど、

「死にたくねえなあ」

生前、俺は生きていたとは言えなかった。

ただ、情性に流されていただけ。

生きてすらいなかったというのに、なぜ死にたいと思えるのか。

「生きたい。生きて生きて生きて、そして逝きたい」

こんな何も無い空間でも色褪せることなく、より彩度を増す想い。

「まだ生きてねえのに、死ねるわけねえだろっつー!!!」

「強情なやつじゃのう。とっとと死んで楽になればいいものを」

「……………あ？」

なんか、明らかにツラをかぶった爺がすぐ横にいた。

「いつの間だ?」

生きたい。

「いつの間になって、お主がぶつぶつ言い始めたときからじゃけど」

「え？」

「てことはなんだ？」

「俺はずっとぶつぶつ呟いているところを見られていたのか？」

「恥っず！」

「俺恥っず！」

「まあ、お主が恥っずかしいとかは割りとどろでもいいんじゃないよ」

「よくなーよ」

「いや、マジで。」

「もう分かっているとは思いますが、わしは神じゃ。神には、いつまでも死にきらないでウダウダしている魂をあの手と送る役目がある」

「ほっ？」

「お主は先ほど、『まだ生きてねえのに、死ねるわけねえだろうっ！……！』とか言っておったがのう。しかし、確かにお主は、『生

きて』『、『死んだ』んじゃよ。命は一人に一つ。これが鉄則じゃ

」

.....。

「第一、最近の人間たちは命を軽く見すぎておる。ただ毎日を漫然と生きおってからに」

「.....がれ」

「せつかくの命がこれでは無意味。お主もその例に漏れない」

「.....り.....がれ」

「分かったら早く黙りやがれヅラ爺いいつつつつつ.....!!!!!!」

「.....! ほっ?!」

爺の胸倉を掴み、叫ぶ。

「さっきから聞いてりゃあ偉そうに」

「いや、実際偉いんじゃないけど。っーかヅラて」

「黙れ。そりゃああんたの言つとおり、俺は毎日毎日ただ生きていただけだよ。でもなあ、それじゃあ『生きて』ねえんだよ」

「むう」

「けどよあ、そんな自分にムカついて、イラついて、変わりたいと思っただら死んじまうしよあ……………ヒック……………。俺、どうすりゃあズズッいいんだよあ……………」

言葉とともに、涙と嗚咽が漏れる。

「……………お主は、後悔してるのか？」

「ヒック……………当たり前だ……………」

じゃなかったら、『生きたい』なんて思わない。

「ふむ。ならばお主、『魔法先生ネギま！』の世界へ行ってみんか？」

「……………は？」

……………何のことだか分からん。

「お主は自分を変え、『生きる理由』が欲しいのじゃろっ？ならばこのまま生き返らず、命の危機が多い世界のほうがよいのでは？」

「いや、まあそりゃあな、平和な世界で生きる理由を見出せったって難しいだろうけど」

「大丈夫。すぐに死んでしまったら仕方ないから、死にづらいようにするからのお」

「え？いや、ちょ？」

あの？

勝手に話が進んでいるんですが？

「では行くがよい！汝の人生に、幸多からんことを！」

「ちょっとおおっつっ?!」

そこで俺の意識は途絶えた。

「……………んあ？」

意識を取り戻すと、俺は森の中で倒れていた。

【無事に転送が成功したようなので、能力の開示をします】

「は？」

頭の中に、機械的な声と文章が流れてくる。

【能力1・獣王の巢

混沌の固有結界。

原点は月姫に登場したネロ・カオス。

666の生命の因子が混濁し渦を巻く混沌の世界。

内部の生命因子を使い魔の如く使役する。その形状は現界の瞬間に決定しているため、何が出るかは本人にもわからない。しかし、幻想種や小動物といった強弱、種類など、ある程度の決定はできる。

666という数はあくまで「因子」であり、それをもって小規模な生命の系統樹を再現しているため、現れる生物の「種類」は666という数以上のもつと多数にわたる（例えば、因子を2つ以上用いた獣を作ること可能ということ）。

666の使い魔で武装している、などとも言われるが、獣は発動者と同じであり同位。本来従者である使い魔が、発動者と同格、発動者「使い魔」という存在にもなっている。

普通に殺されても混沌に戻るだけで獣の因子そのものは失われず、発動者の体に戻せばまた復活する。このため、殺すには666の生命因子全てを一気に葬る必要がある。混沌の性質上、それは非常に困難。

自身の体内を固有結界としているため、抑止力による修正を受けないという特性がある。

能力2・十二の試練^{【トット・ハンズ下】}

ランクB以下の攻撃をシャットアウトしてしまう上、11の代替生命ストックがある。さらに一度受けた殺害方法では二度と殺せないで、本気で倒すにはAランク以上の攻撃かつ12通りの方法で殺さなければならぬ。(しかし、オーバーキル級のダメージを受けるとダメージ分の生命ストックを消費するようで、この通りにはならない)

あなたの能力は以上です。それでは、あなたの生が良きものであることを】

「……………はあ?!」

生きたいって言ったけど。

.....これはない。

下手な不死より性質が悪いじゃないか。

細胞一つ残らず消し飛んだら終わり、とかいう魔人を超えたぞ。

「しかも、時間が経ちすぎたらただの混沌になるというタイムリミット付」

獣王の巢の副作用的なやつがネックだ。

数百年かかるが、徐々に自我が薄れていき、最終的にはただの混沌となる。

可及的速やかに、できれば百年以内にこの問題を片付けなければおちおち眠ることもできん。

あれは確か、666の獣の因子を人の身に内包した結果起こる弊害だろ？

だったら、人外の体を手に入れるか、その因子全てに『俺』という一つ概念を与えるかで解決できるんじゃないか？

前者ならば、ここがネギま！の世界であるならば真祖となる術式が存在するらしいし、因子を浸食するくらいの力が必要な後者に比べ現実的か？

.....いやいや。

これで真祖になってみる。

ただでさえ死に辛いものにもはや不死だろう。
そこまでは求めていないぞ。

「結局、どつすりゃあいいのやら」

「身包み全部置いていきゃあ良いのさ」

「……………え？」

考えていたら、後ろに誰か来ていたけど、

「……………誰？」

「誰って盗賊だよ」

「……………」

「おい。しっかりしろー」

……………。

「え？」

「ためた拳銃に出てきたリアクションが「え？」ておい。もっとな
んかねえのかよ？」

「あるわけねえだろうが。バカヤロー」

「よし良い度胸だ。殺して身包み剥いでく」

やっちゃまった。

つーか盗賊で、ここは魔法世界か？

旧世界（この言い方あまり好きになれない）なら盗賊なんて商売にならないし。

まあ、十二の試練のおかげで、大概の攻撃なら無傷だろうが。

「死ねえ！」

自称盗賊が鉈で斬りかかってくる。

.....鉈？

魔法使いじゃ《ガキイインツッ！》ないの？

「.....おい、お前」

「何だよ盗賊」

「.....何で刃が通らない？」

「魔法」

どうせ説明しても分からないだろうし、だったら魔法とでも言っておけば良い。

………驚いた盗賊のアホ面が最高だ。
ブフォッ！！（吹）

真相に驚いた。

「……………笑うなや」

「ぷぷっ……………無理……………ブフッ！」

「笑うなっただよおおお！！大体魔法って何だ！？泣くぞこんと
「チヨイ待った」おおう？なんだよ？」

えつと。

あれ？

魔法を知らない+描写は無かったけどこの「いかにも中世欧州です」
って格好は……………？

「質問1・魔法を知らない？」

「当たり前だろう。あんな異端な力」

「質問2・この世界って魔法世界じゃない？」

「なんだそりゃ？」

「……………」

「……………」

……え？

「ウソオオオツツツ?!」

「ホントオオオツツツ!!」

あ、この人ノリいいわ。

このテンションに着いてきてくれる。

まあ、ただの馬鹿とも言うが。

「とりあえず質問を続けよう」

「え？俺いい加減お前から略奪しないと」「質問3」「無視かよ」

勿論だ。

さあいくぞ。

「今、西暦何年？」

「学がねえから知らねえ」

「……………」

「.....」

いや待て、待つんだ俺。

むしろチャンスだ。

西暦を知らないやつが現代欧州にいるわけが無い。

これで旧世界（やっぱり好きになれない）だということ、今がおそらく中世欧州ということを確認できたぞ！

「あゝ、参考になるかもしれないから言っておくが、7年前にヘンリー5世様が亡くなられたぞ？」

.....ヘンリー5世？

「百年戦争おおっつっつ?!」

マジかい。

唐突だが、俺は地味に世界史が好きだ。

いや、訂正しよう。

世界史を教えていたうちの高校の新任女教師が好きだった。まあ、タイプのにといいだけの話ではあるが。

そんなんだつたから、授業中は頑張った。

他の教師から嫌われるくらい頑張った。

友達から蔑まれるくらい頑張った。

でだ、その先生は百年戦争の辺りが好きだったわけだ。

俺はそのことを知ると、例のごとく頑張った。
結果、

先生にヒカれるくらいに詳しくなっていた。

うん。

相手はそこまで求めていなかったらしい。
普通にキモイって言われた。

そのことは置いてだ。

史実によると、ヘンリー5世が死んだのは1422年。

その7年後の今は1429年。

1429年、てえと……………。

ジャンヌ・ダルクがオルレアンを解放する辺りじゃねえか!?

「質問4・今何月何日だ?!」

「ああ、それなら分かるぞ。3月4日だ」

オルレアン解放は4月29日〜5月8日!
時間は大丈夫だ!

「質問5・ここはどこだ?」

「オルレアンさあ」

奇跡か?!

最悪カンだけで動く覚悟をしたぞ!

とにかく、これでとりあえずの指針は決まったな。

- ・しばらくこの土地にいること
- ・そのために職を探すこと
- ・聖女と呼ばれた女を見物すること
- ・ジャンヌ・ダルクの処刑を阻止すること
- ・長期的には混沌化を止める手立てを考えること
- ・そもそも獣を御する訓練とかもすること

「じゃ、色々ありがとだね。俺、しばらくこの辺りにいるからな。またね〜」

「ん？ああ、いやいやこれくらい」

そう別れのあいさつをして、立ち去るいい人。

「て、身包み置いてけやあっ！..！」

「嫌だよ」

「ううして、盗賊と俺のコントは三日間続いた。」

マジかい。(後書き)

プログラーグ的なのが終わります。

パネエ。
(前書き)

百年戦争編、スタートです。

パネエ。

あれから、ざっと一ヶ月強が経った。

「はい。運命の4月29日です」

「なにが運命かは知らんが、とりあえず身包みを「一ヶ月以上もクドイ」生活かかってんだよ！」

盗賊の家計なんて知らんがな。

「第一、盗賊になんぞなつてからに、故郷の母ちゃんが泣いているぞ『アシル』」

「俺の故郷はここだ。それに、盗賊は爺さんの代からだ。前にも言っただろう『ムロク』」

「あゝ。だったなあ」

あ、『ムロク』は俺の名前ね。
漢字に直すと『六禄』。

こっちに来てから付け直した。

実際は前の名前でもよかつたんだが、前の世界との決別の意味をこめて変えた。

ちなみに、前の名前は『柳田 正晴』。

まあ、どうでもいいがな。

「と、来たか？」

「ん〜？おお！ムロクの言った通りになったな！」

森のはずれから、遠くに見える砂煙。

「聖女率いるフランス軍のお出ました」

歴史どおり過ぎて、思わず『ニィッ』と笑みが出る。

「おい、その顔やめろ。怖い」

「黙れ盗賊面」

「当たり前だバカヤロー」

アシルとは、この一ヶ月チョイでここまで軽口をたたける様になっ

た。

こいつが腹を空かしたときに、ウサギをとっ捕まえて食わせたこともある。

逆に俺は調味料とかを貰ったりしたわけだが。

「……………お前もっ盗賊やめろよ」

「……………ほかに職があればな」

世の中って世知辛い。

そうこうしている間に、だいぶ軍が近くまで来ていた。

「どれどれ？あの先頭で騎馬に跨ってるのがそうか？」

戦場に女なんて、他にいないだろうし。

そして、その顔がはっきりと（肉体のスペックのおかげで）見えたとき、

「……………聖女、ねえ」

他の者には顔を見せず、ただ、怯えた顔をした少女の顔が見えた。

気に入らない。

「なあなあ、聖女ってどんな面だった？」

人間の視力では視認ができなかったアシルが訊いてくる。
まあ、強いて答えると、

「美人だったが、気に入らねえ顔してた」

「美女じゃあないのか……………」

色気があってエロい女が趣味か？
こいつ？

「つーか、気にするべきところが違う」

「男としては間違っていないと思う」

「……………確かに」

「説得されんなよ」

まあ、実際好みは分かれるだろうが。

「で？気に入らないってのは？」

「聞くのかよ」

「当たり前だ」

そうかい。

俺はお前の『当たり前』の基準が分からなくなったよ。

この間なんて、『当たり前』に俺のところで晩飯食ってたよな。
おい。

「気にするなよ」

「気にするわ。……………心読まれた?!」

「一月以上顔を合わせてりゃあなあ」

「そんなもんだっけ!? 読心術って!?!」

「ちげーよ。付き合いが短いけど、濃いから勘で分かるんだよ」

マジか?!

「で、どんなだったんだ？」

「……………今にも泣きそうな面してた」

「……………なるほどなあ」

当たり前だ。

彼女はこの当時まだ16歳、しかも少女だ。
怖くて怖くて怖くて、仕方ないだろう。

「それは気に入らねえなあ」

「だろう？」

さて、どうしたものか？

「……………会ってみるかあ？」

「勝手にしろ。俺は行けないからな」

ああ、お尋ね者の盗賊だからね。

「じゃ、適当に行って来る」

「土産期待してる」

するんじゃねー。

某蛇みたいに。

で、フランス軍陣営ってなあここか？
とりあえずそれっぽいところに来ただけ。

「見つかると面倒臭えしなあ」

絶対に聖女さんは奥のテントだろうし。
どうしたものやら。

空から行くにしても、獣の因子の中には鳥系統のものもあるが、それだと『俺が会った』ことにならないし。

「ん~~~~」。某蛇の如くダンボールでもかぶるか？」

この時代にそんなものはありません。

「適当にいくつか獣を放って、騒ぎを起こすか」

これが無難だろう。

ちなみに、かつて忍者たちも同じ手を使って潜入していたらしい。
これを『虫獣遁の術』という。

のをチヨイスしておいた。
幻獣なんかはさすがに出せない。

まあ、なんにしる当初の目的は果たせそうだ。

「さてさて、この際」

さてさて、聖女さんはどちらかなって。

某蛇みたいに。(後書き)

獣王の巢初出しです。

驚いた。

「お、なんか立派なテント」

適当にぶらついていたら、なんか士官用っぽいテントが見えた。
ここかな？

俺が起こした騒ぎで逃げてなきゃいいが。

「じゃまするよー」

テントの入り口から普通に入ると、

「何者だ?!」

「イングランドの手の者か?!」

「この騒ぎは何だ?!」

めっちゃ騒がれた。

そりゃ当たり前だろう。

外がこんだけ騒がしいんだ、そこに見慣れない格好をしたやつが現れてみる、十中八九敵だと思っだろう。

俺だっと思う。

「早く答えよ！」

「そんなにカツカしないで。とりあえずあんたらの敵ではないよ」

騒ぎを起こしたけど。

「おまえは何者なんだ?!」

うるさいのは無視して、テントの中を見回す。

士官用というよりも、会議室になっているテントの隅に、震えている少女がいるのを見つける。

後、それを守るためにかそいつの前に立っているギョロ目の騎士。

……………どっかで見た気が。

少女は聖女さんだろ？

騎士は何者だ？

この既視感は何だ？

「ま、自己紹介しようか。『水無月^{みなづき} 六祿^{むつろく}』だ。この地方だと『ムロク ミナツキ』だな。あんたらは？」

「……………私は警護の『シリル アルベール』。この方たちは」

「いい。名前は本人から聞くものだ」

祖母ちゃんからよく言われていた。

「人の名前は、ちゃんと本人から聞きなさい」って。

人との繋がりがどうか言っていたが、もはや覚えてはいない。

「……………ジャンヌ・ダルク。……………『聖女』と呼ばれています」

「どうもー」

やっぱりこいつがねえ。

ただの女の子にしか見えんが。

……………まあ、えらくおどおどしていることを除けばだが。

「私は、『ジル・ド・レイ』といいます」

「よろしくー」

……………ん？

ジル・ド・レイ？
ギョロ目、オルレアン解放、騎士、ジル・ド・レイ。

.....。

Fate/zeroのキャスターか？！
たしかに、この時点ではまだ騎士だったけど！
百年戦争でオルレアン解放にいたけど！

まさか、マジでギョロ目だったとは.....！？

気に入った。

「なぜだか、非常に不愉快なことを思われている気がするのですが？」

「気のせいだ。ジル・ド・レイ卿」

気のせいだとも。

ああ、そうだとも。

けっしてギョロ目とか思ってたなどいない。

「……………まあ、よいでしょう。それで？貴方の目的は？」

「噂の聖女を見物に来た」

嘘じゃねえよ。

だからそんな疑った目で見るな。

こら、その聖女。

一歩引くんじゃない。

「……………私の見物って、何ですか？」

「興味本位」

いや、他に理由ないって。
どんな顔してるのかな？とかは考えていたけど。

「……………外の騒ぎも、貴方ですか？」

「おう。大量の獣たちを暴れさせている」

むしろ、それしかできないのだが。

「兵たちは皆、行軍で疲弊している！いい加減に騒ぎを収めてください！」

ジル・ド・レイが激昂する。

このころはまだ、きちんと騎士をしていたからまともな感性を持っているようだ。

「ん〜。いいよ」

ピタリ。

と、外の騒ぎが止む。
そして、

ウゾゾゾゾゾ！！！！！！！！！

300もの命の混濁が、テント下部、地面との隙間から這い出でて
俺へと戻る。

「はい、終わり」

……………周りからの反応が無い。
見渡してみると、

「貴様！魔法使いか！？異端なる者め！！」

……………剣を抜いて、構えられていた。
いや、まあ正しい反応だけど。

「異端もクソも、俺は吸血鬼。化物だぜ？」

能力と肉体の維持に、吸血行為が必要なんだよね。それも兼ねて戦地に来たんだが。

「……………ならば！神の下で許しを乞うがいい！！」

騎士たちが、剣を振りかざす。

「待ってください！！」

「「「ん?!」「」」

一触即発の空気の中、男ではない高い声が響く。

「……………貴方は私の『見物』にいらしたんですね?」

「そうだな」

なんだ?

急に?

さっきも言っただろう。

「……………では、『見物料』をお支払い頂けませんか?」

「金はねえ」

……………ククツ。

……………いや、分かっているけどね。
何を要求されるかなんて。

第一、金なら多少なりアシルから貰ってるし。
土産代だけど。

「……………だったら、私とともに戦ってはくれませんか？」

「ククククツ！ああ、いいとも。それに、俺の能力を見てのその態度」

笑いが止まらない。

口元が歪み、どんどん気分が高揚する。

「俺はあんたが気に入らなっただけ。ジャンヌ・ダルク、俺はあんたに着いていこう」

絶対に、惚れたとは言わない。

気に入った。(後書き)

主人公、参戦です。

戦争ねえ。

はい。

一夜明けてオルレアン門前に来ています。

「……………なぜ来てしまった？」

激しく襲い寄せる後悔。

初めは戦争にまぎれてちょっと血液補給するだけのつもりだったのに。

女に惚れて戦争に参戦することになっちまうとは……………っ！

「……………こんにちは」

「おいつす」

声をかけてきた参戦の原因。

まあ、頼られたと思えば悪い気分ではないが。

「……………申し訳ございません。……………本来なら、部外者の貴方にこんな」

「気にすんない。『見物料』を支払っているだけだ。それに、あの場はお前のおかげで穏便にすんだ。」

「！……………分かっていたのですか」

あのままでは、俺の一方的な殺戮が始まっていた。

聖女はそれを防ぐために、あのような提案をしていた。

実際、契約は成立しているし気にすることは無い。

「……………でも」

「俺は必要な血液が補充できる。お前らはオルレアンを解放できる。何一つ問題は無い」

「……………貴方は、戦うのが怖くないんですか？命を奪うことが、怖くないんですか？」

おおっ。

まさかの質問だ。

まあ、答えならとっくに出てはいるが。

「戦うわけじゃない。俺の場合はただの食事だ。命を奪うって言われても、あんたらが豚やら何やらを食うのと似た感覚だしな」

「……………」

嘘だ。

俺はまだ、人間としての部分が強い。

吸血だけならまだしも、能力のことを考えたらどうしても『食べる』という選択肢しかない。

なのにどうして、家畜を食うのと同じ感覚になれるか。なれるわけがない。

しかし、この世界に来て一ヶ月チヨイ。

幸い、まだ吸血衝動は現れていないが、それも時間の問題。肉体の維持もそろそろ限界だ。

「だから安心しろ。俺がお前の敵を喰らい尽くしてやる」

「……………分かりました。ですが、絶対にご無理をなさらない
てください」

無理をするな、ねえ。

「阿呆。女の前でくらい格好付けさせろ。そのためなら、多少の無理くらいするぞ」

惚れた女ならなおさら。
それが『男の子』ってもんだ。

どうしたものか。

さて、参戦が決定したが、ここで問題が生じる。史実によれば、オルレアン解放は4月29日～5月7日の間に行われている。

俺が手を出せば、行軍の時間などを考慮して、実質三日あれば十分ケリがつく。

「でもなあ、それだと駄目なんだよなあ」

「……………何が、ですか？」

「ん？全部俺が手を出すかどうかって話」

「……………駄目、なんですか？」

「当たり前だ。戦争はな、一つの産業としての側面も持っている」

例えば、武器が当然必要になり、その手の商人が儲かる。

また、兵糧も必要だからその関係も儲かる。

まあ、兵糧に関しては臨時の税として取り立てるといパターンも多いが。

「兵士たちだって、手柄首を挙げて出世を狙っているし、俺が単騎

で出れば被害は無いだろうがただでさえ薄い戦争の『意義』が消えちまうんだよなあ」

……おい、そんなに驚いたような顔をするな。
なんだ？

俺がそんなことも分からない阿呆だとも？

「……驚きました。できるだけ人が死ななくてすむように、と
思って行動してきたのですが。……戦争に『意義』なんてあつ
たなんて」

「ああ、戦争がくだらないという種類の人間だったか？まあ、実
際くだらないな。悲しいことに、人が死ぬ条件、いや、『死のうと
する』条件が整っているし」

「『死のうとする条件』ですか？なかなか面白そうな話をされてい
ますな」

「ジル・ド・レイか」

いつの間にか後ろに立ちやがって。
見る、ジャンヌなんかビククリしすぎて顔が面白いことになってい
る。

「それで？『死のうとする条件』とは？」

「簡単だ。『護らなくてはいけない時』、これがその条件だ」

「……………『護らなくてはいけない時』、ですか？」

「どづいづことでしょうか？」

むう。

説明してもいいんだが。

……………面倒だな。

「俺も、俺の先生からの受け売りだな。答えはよく知らん。自分たちで考えてみてくれ」

「……………」

うん。

問題を出すだけ出して、自分でもすごく無責任だと思う。

まあ、貴族なら分かってもらわなくては困る問題だが。

いや、片方は田舎娘か。

ちなみに、今の問題を出したのは中学の数学の先生だ。

因数分解の授業の最中に教えてくれたが、「本当は社会科の教師になりたかった」と言っていたのが記憶に残っている。

よく授業をサボって競馬をしている先生だった。

そのせいでPTAに訴えられて教師を辞めさせられかけたのを覚え

ている。
それも4回。

よく俺の卒業式まで残っていられたものだ。

「……………ある意味、聖女の奇跡を越えていたな」

「……………え？」

「気にするな。こつちの話だ。まあとにかく、俺はジョーカーどころかワイルドカード。ここぞという時にしか出ない、と言っか出れないからな」

「……………分かりました」

物分りがよくて助かる。

とりあえず、これで歴史が変わりすぎるのは防げそつだ。

「……………ところで、じょーかーとか、わいんどかーどとは何なの
ですか？」

「……………カードしないの？」

「……………田舎育ちなので」

「……………」

吸血鬼とは。

門の上から戦場を見渡す。

「おーおー、やってるやってる」

「……………目を瞑って、何をなさっているのですか？」

「分体を門の上に飛ばして、戦場を見ている」

今、門の上にいるのは鳥の因子から出した分体だ。

ちなみに、鳥の因子と指定して出したとき、最初に出てきたのが鶏だったのは焦った。

あんな使いどころの無いもの、どうしると。

「……………吸血鬼の魔法ですか」

「別に吸血鬼限定じゃなくて、俺限定なんだがな」

『獣王の巢』は体内に展開した『固有結界』だからな。

『固有結界』は発動者の心象風景で世界を塗りつぶすもの。

心象風景は人それぞれだから、『獣王の巢』は俺以外には使えない。

いや、まあ『獣王の巢』は神から貰ったものだから、俺の心象風景ではないだろうが。

と言っかあつてほしくない。

「……………そもそも、吸血鬼とは何なのですか？」

「ん？ククツ教会に狩られる化物さ。なあ、『聖女』さん？」

「……………そんな意地の悪い言い方をしないでください。……………吸血鬼とは、どのように生まれるのですか？…ここまで人とそっくりというのはどうも」

ああ、そういうことね。

「吸血鬼には二種類ある。一つは生まれた時点で吸血種である者。これは『真祖』と呼ばれる。もう一つは他の吸血種に咬まれて吸血鬼化した者。こっちは『死徒』と呼ばれる。俺は後者だな」

ここがネギまの世界ならば、『真祖』の扱いが違つたろうが、まあどうでもいい。

「……………では貴方は」

「そ。元人間だ」

いや、意識的にはまだ人間だがな。

「……………吸血鬼になってどのくらい？」

「そろそろ二ヶ月」

うん。

割と最近だよな。

「……………なんで、吸血鬼に」

「知らん。事故みたいなものだ。死んで、目が覚めたらこうなっていた」

嘘はついていない。

死んで、目が覚めるまでの間に一悶着あったが。

「まあ、おそらくは死んでいる間に吸血鬼かなんかに咬まれたんだろ。じゃなかったら、俺の頭の中に流れ込んできた知識の理由がつかない」

「……………知識？」

「ああ、この体のこと、使い方とかの知識だ」

もう一度言っつ。
嘘はついていない。

「……………貴方に、神の祝福があらんことを」

「唐突に十字を切るな。祈るな。なんかあったのかと思って地味に怖い」

まあ、祈ったところで俺が会ったあの神はキリスト教とは無縁そうだが。
しかも、きたのは祝福じゃなくて同情だったし。

「んじゃ、お天道様もまだ高いし、俺はそろそろテントで休むわ
……………ところで、吸血鬼は日に弱いと聞きますが、それでも
ないようですね」

「ん？そつでもないぞ」

なんだ。

気付いてなかったのか。

「俺はずっと、日陰から出ていないぞ」

「……………え？」

俺は日陰の中にずっといたし、門の上の分体には覆いを被せてある。前に一度、この世界に来たばかりの頃にすっかり日向に出てしまったことがある。

その瞬間、痛みも感じないやばいレベルの火傷になり、死にかけた。

「で、吸血鬼の回復力で治っていったのは良いんだが、治ってきてからが地獄でな。狂い死ぬかと思うくらい痛かった」

「……………貴方に、神の祝福があらんことを……………」

……………せつに願う」

「いらん部分がついた？！俺そんなに幸薄そうに見えるの？！」

予想外だ。

「んんんんん」

5月3日夜。

フランス軍陣内をぶらぶらする。

なんでかって？

吸血鬼だから夜は眠れないんだ。

でも、この時代の夜に開いてる店なんて、酒場か娼館くらい。

酒は呑めるが、飲み仲間がいないと寂しいし、吸血鬼ボデイのせいで性欲も無い。

………いや、あるにはあるんだが、とにかく薄い。

後、病気も怖いし。

というわけで、夜は大概散歩をしている。

「んんんんん」

鼻歌交じりに散歩をしていると、時々面白いものが見れる。

昨日も、「この戦いが終わったら俺も」な現場に遭遇した。

まあ、そいつは今日当たり前のように死にかけたので、分体を使って助けてやった。

あれを見た後で死なすのは、咽喉に小骨が五本くらい刺さったのと同じくらいつらい。

「…………マジかい」

後に魔女として異端審問にかけられるジャンヌだが、まさか本当に魔女だったとは。

確かに、この軍は死者に対して負傷者が少ないのが気になっていたが…………。

とりあえず、仕事を終えて出てきたところを捕まえるか。

「……………はい。確かに私は魔女、いえ、魔法使いです」

「おお。あっさりしすぎて拍子抜け」

とっ捕まえて目立たない場所に行き、さくつと聞いてみたら簡単に話してくれた。

まあ、俺なんて吸血鬼だしね。

正体がばれたらやばいのは、間違いなく俺のほうだ。

「んで？なんで正体がばれるかもしれないのにあんな真似を？」

「……………だって……………痛そうだったから……………」

……………何この可愛い生き物？

顔赤くして俯いて、手を胸の前で合わせてもじもじしてって……………。

「ヤバイ。襲いたい」

「いきなりなんですか?!」

「本心だ。可愛すぎる」

「ちょっとおっ?!」

ジャンヌの台詞から三点リーダーが消えたが、よほどインパクトがあつたのだろう。

だが!

これは偽らざる本心だ!!

「抱かせてくれ」

「駄目です」

「一晩でいいから」

「大声出しますよ?」

「一発だけでいいから」

「もはややりたいだけ?!」

男なんてそんなもんだ。

「……………最低ですね」

「そう。しかし男として生まれることは最高だ」

「……………」

もはや黙られた?!

「ま、今のは冗談として」

「……………いや、ものすごく目が本気だったんですけど」

当たり前だ。

「あんたが魔法使いってことは黙っててやるよ。俺も似たようなもんだしな」

そのままぶらりと立ち去る。

後には嵐の後のようにぐったりとしたジャンヌだけ。
さて、散歩再開だ。

悪かった。

翌日の昼下がりに。

「悪かったと思っている」

「(っーん)」

「いや、本当にすまない」

「(ぷいっ)」

「せめてこっちを見てください」

「嫌です」

さっきから、こっちを見てすらくれない。
こうなったのには、訳がある。

昨日のヤラせてくれ発言が問題だったんだ。
まあ、処女相手にそんなこと言ったらなあ。

「俺が悪かった。いきなりあんなこと言っなんて」

「本当です」

「でも、お前が魅力的だったのは、まごうことなき事実だ」

「……………そんなk「激しく同感です!?!?!」「?!?!」

俺とジャンヌが話していたら、急に現れたやつ。

「……………ジル・ド・レイ、なぜここにいる?」

そしてなぜ出てきた?

空気を読んだらこれないと思うが?

「聖女あるとこに!このジル・ド・レイあり!」

「……………」

それを世間ではストーカーと言う。

「まあいい。うせる」

「私の扱いが酷くないでしょうか?!」

「ストーカー変態に声をかけてやっただけでもありがたく思え」

「……………私も、そう思います」

「聖女まで?!」

そのまま泣いて走り去るジル・ド・レイ。

それでも騎士か？

そして今は戦闘の真っ最中だったのでは？

抜け出してきたのかあいつは？

「……………あれを見たら、馬鹿らしくなりました」

「それは良かった。で？俺は許してもらえたのかい？」

「……………もうとっくです」

……………はい？

「え？じゃあ、あんだだけ必死になって謝ったのは？」

「……………貴方の…慌てた顔が見たかったから」

……やっぱり可愛い。
惚れ直すね。

「んじゃま、許してもらったのはいいんだけど、何で魔法が使えるの？」

史実では、ただの田舎娘だったはずだが。

「……母が、魔法世界というところの出身だったんです。魔法は母から教わりました」

母ちゃんのせいかい。
で、もう一つの疑問。

「何で従軍を志願したんだ？」

「……『魔法の射手』サキタ・マギカや『治癒』クイラ等の基本的な魔法を教わった私は、何時しかこの力を誰かの役に立てたいと考えるようになっていました」

「で、その結果が従軍と？」

「……………はい。今は戦時。ならば戦場で兵士たちのためにと
思
つて」

……………なるほどねえ。

善行で自分の首を絞める、面倒臭えパターンだな。

やっていることがなまじ正しい分、押さえが効かねえし。
つたく、俺が守ってやらなきや駄目か？

さて、どうやって周りからこいつを騙くらかすかねえ？

5月9日。(前書き)

あのエターナルロリータが登場します。

5月9日。

5月9日。

史実であればオルレアン解放が終了する日。
しかし、その歴史は覆された。

「前線より報告！！怪しげな力を使う者たちが敵軍に現れ、戦況は我が軍が不利です！！！！」

「怪しげな力ですと?!」

正午を越える頃、テントに駆け入った兵士からの報告に、ジル・ド・レイが驚きのあまり叫ぶ。

「……………魔法かもしれません」

「むしろ、それ以外にあるのか？」

小声で俺に耳打ちをするジャンヌに、肯定の意を返す。

「……………どつされますか？」

遠慮をするように訊ねるジャンヌ。

その顔を見たら、言うことなど決まっている。

「ワイルドカードを切るぞ」

体をマントで完全に覆い、明らかに魔法が使われているであろう地点まで全力で走る。

「熱い。暑いじゃなくて熱い」

うん。

吸血鬼ボディマジしんどい。
完全に体を覆っても、まだ熱さが残る。

「ま、あいつのためと思えばどうにか。と、あいつか？」

うちの軍隊に対し、魔法（おそらく『魔法の射手』）を放っている二人組み。

あれ？

片方の金髪少女は、どこかで見た気がするんだが？

まあいい。

到着だ。

「おいテメエらあつ！人様相手に何してくれてんだあつ！？」

とりあえず、まずは威嚇。

「何って、戦争だが？というかお前こそなんだ？」

少女のほうと言う。

ところで、本当に誰だろうか？

隣のイケメンには見覚えが無いのだが。

「いってエヴァ。そんな怪しいやつにかまうな」

「でも兄様」

.....エヴァ？

ところで、エヴァンジェリンに兄がいただろうか？
いなかったとは思っただが。

「……………！エヴァは軍を相手にしてくれ！私がこいつを殺る…！」

「兄様?!」

「殺るって……………。最近のガキは物騒でいけない」

そんな俺は17歳。
さあ、戦闘開始だ。

「逃げるんじえねええつつ…!!」

「ん？もう大丈夫か？」

で、場所がうまくいこと日陰になるように誘導して逃げつつ、相手の戦力把握に努めたわけだが、

「『トレス・オン投影開始』、『偽・螺旋剣（カラドボルグ？）』！！」

剣を無理やり捻じ曲げ、矢にしたような剣がマクダウエル兄の手元に現れる。

「……間違いねえ、転生者だ。」

「しかも、『無限の剣製』アンリミテッド・ブレイドワークスを特典に付けてやる。」

「ま、大丈夫だがね。行け！獣たち！！」

能力を隠すため、あたかも最初からこの周辺に配置していたかのよう
に、獣たちを繰り出す。

さて、どうなることやら。

5月9日。(後書き)

初陣は転生者。
マクダウェル兄となりました。

お喋り。

「ご自慢の弓は使わねえのかあ？」

「君ぐらいならいらさないさ、獣使い」

よしよし。

うまいこと勘違いしてくれたか。

しかし、何で相手は弓を使わない？

距離が開いている状態で『偽・螺旋剣』を投影したならば、弓を使うのが当たり前だし、それで無かったならば『干将・莫耶』を使うはずだが……………。

「ま、いいか。かつ喰らえ！」

四方八方から獣を襲わせる。
が、

「甘い！」

両手で握られた『偽・螺旋剣』ですべて防がれる。

……………両手？

なぜ両手で剣を持つ？

「まだまだあ！」

さらに獣を放ち、考えるための時間と隙を作る。

考える。

確実に勝ち、なおかつこいつが戦場に戻って被害を拡大させない方法を。

あいつはエヴァンジェリンに兄と呼ばれたことから、まず間違いなく真祖化している。

次に、アーチャーの投影を使ったことから、転生者であることも推測できる。

ならなぜ、代名詞とも言える夫婦中華剣を使わない。

なぜ、弓を使わない。

なぜ、両手で剣を握る。

.....なるほどね。

「お前の弱点、見つけたあ」

ニイツ、と化け物らしく笑う。

くSide転生者く

「お前の弱点、見つけたあ」

全身マントの怪しげな獣使いの男が、そう言い放つ。

そんな筈は無い。

神から私が貰った三つの転生特典。

その内の二つである『無限の剣製』、そして真祖の肉体に死角などは無い。

「出鱈目だな。私にそんなものは無い」

「ククツ、そんなことを言っている様だったら三流だぜ？金髪イケメンのアーチャーさん？」

?!

アーチャーだと?!

私はこれまで弓を使っていない。

それなのに私をアーチャーと呼ぶということは、こいつまさか、転

生者か？！

それ以前に、こいつはエヴァが分かった！

いや待て、こいつに動揺を悟られるな。

冷静に、落ち着くんだ。

転生者で、多数の獣を従える。

これだけで奴の能力が絞れる。

それに、私の考えを裏付けするように、獣たちは無数に現れる。

間違いない。

こいつの能力は『獣王の巢』、吸血鬼だ！

「ふむ。では、その私の弱点とやらを教えてもらおうか？」

「戦っている本人に言うわけねえだろうが。それよか、少しばかりお喋りしようや」

「……………こいつはいつたい、何を考えている？」

まあいい。

私も『アレ』の投影には時間がかかる。

「悪くない提案だが、お喋りとは？」

「あんたらさ、何で真祖の吸血鬼なのにイングランド軍に協力してんだ？」

なんだ。
そんなことか。

「簡単な話だ。イングランドに私たちの力を貸す代わりに、身柄と自由を保障してもらっているのさ。そういう君は、何でフランス軍に協力しているのかな？」

戦争に乱入してきたことから、おそらく、奴はフランス軍に属している。

「ん？俺か？俺も簡単だ」

そして一呼吸おき、

「女に会ったら惚れちまったんだ。バカヤロー」

〈Side六禄〉

「クハッ、ハハハハハハッツツ!!!」

唐突に笑い出した相手。

まあ、人によつては馬鹿らしいだろうな。

「さて、お喋りついでに自己紹介だ。俺は『水無月 六禄』。あんなと同じ吸血鬼だ」

「ハアツハアツ……………。『カイン・A・T・マクダウエル』だ」

カイン……………ね。

妹は『福音』で、兄貴は『弟殺しの大罪人』とは。

親は何を想つてこの名前をつけたんだか。

っーか笑いすぎ。

「ふむ。それでは、そろそろお仕舞にしようか」

「おう、そうしようか」

分体五百を用いて、『アレ』の準備をする。

「『投影開始』」

『偽・螺旋剣』を破棄し、奴が新たに投影したのは、

「『エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣』！！」

あ、ヤベエ。
俺の天敵だ。

焼ける。

「『転輪する勝利の剣』！！」

『転輪する勝利の剣』

『約束された勝利の剣』エクスカリバーの姉妹剣。

柄には擬似太陽を封じてあり、その出力たるやエクスカリバーに匹敵する。

エクスカリバーが星の光によって両断する剣ならば、ガラティーンは太陽の灼熱を以て敵を焼き尽くす剣。

まあようするにだ。

「あ、やべえ。死んだくせえ」

つーか、アレは神造兵器じゃなかったのか。
なぜ投影できる。

まったく、『約束された勝利の剣』といい、『無毀なる湖光』アロンドライトといい、円卓の騎士どもはそろって化け物か。

しかし、吸血鬼が吸血鬼退治に太陽の剣を使うとは、ふざけた話だ。

「覚悟しろ。混沌の転生者」

おや。

わざわざ『転輪する勝利の剣』を投影した時点でうすうす気付いてはいたが、俺の能力が分かっていたか。
ま、

「やなこつた。パチモンの『正義の味方』」

「！オオオオツツツ！！『転輪する勝利の剣』！！！！！！」

それでも俺は生きるだけだがね。

）Sideカイン）

太陽の如き剣線が、相手を飲み込む。
相手の最後は、諦めたように両手をポケットに入れ、薄気味悪く笑

っていた。

「フフツ！フハハツハハツハツツツ！！！！！」

だがやはり、この力は最強だ！

あの『獣王の巢』を一撃で葬った！

前世ではいじめられ、それを苦に自殺したが現世では違う！
私が最強だ！

「ハハツ！……………しかし、さすが神造兵器。この威力は使用を自
重せねばな」

剣線の跡は、森を平原に変えた。

この威力のものを使い続けては、世界が滅びてしまつ。
と、『転輪する勝利の剣』が砕けてしまったか。
さすがに、長時間の投影はできないか。

「まあいい。戦場に戻って、エヴァに加勢せねばな」

そして、戦場の方向を向くと、

「だからあんたは三流だつてんだ」

日の下に出ているのに、肌を刺す痛みが無い。
たぶん、普通に太陽に焼かれて死んでも、同様の現象が起きたはず
だが、アレは痛すぎる。
しかし、今回は一瞬で焼かれたので痛みは無かった。
本当に感謝する。

「ああ、それからもう一つ」

むしろこれが本題だが、

「俺の勝ちだ」

「な?!こ!これは!」

何もしないマクダウエル兄に、混沌が絡みつく。

「対真祖用。『創生の土』」

まあ、姫君とでは真祖の格が違うが。

創生の土。

「まさか、『十二の試練』も搭載しているとはな」

「おう。驚いたか」

混沌から逃れようと、マクダウェル兄がもがいているが、それは『創生の土』。

お前では無理だ。

『創生の土』

かの教授さんが『アカシヤの蛇』に伝授された術。五百匹の獣の因子を束ね、対象を捕縛し咀嚼する。その破壊は、大陸を一つ破壊することと同義。

「とまあ、素晴しく身動きの取れない状態になったわけだが、なんか言うことはあるか？」

「私を解放して死んでくれ」

「よし、咀嚼スタート」

捕らわれの状態で余裕だなこいつ。

あ、そうだ。

「今となつては意味が無いが、あなたの弱点教えといてやるよ。あんなさ、力ないだろ？」

「！」

何で分かった？

て顔をしてるけど、両手で剣を使ったり、弓を使わないのを見れば分かる。

弓を引くには割と力が必要だし、夫婦剣を振るならなおさらだ。

力が無いから、剣と一緒に投影した経験を使えない。

それがこいつの弱点だ。

今となつては、どうしようもなく意味の無い情報だ。

ま、俺としてはそんなことはどうでも良くて、真祖の因子を取り込めればいいだけなのだ。

「あんたほどの意識体を取り込むのは骨だろうが、それもまた喜ばしい」

いや本当に助かった助かった。

これで真祖化の目処が立った。

将来的に、ただの混沌にならなくて済む。

「ゲアアツガツ!!」

しかし、痛みには耐性が無かったようで、何もできなくなっているのには助かる。

これが本家本元だったら、この状態から固有結界発動とか有りうるからな。

こうやって叫んでいてくれれば、詠唱もできないだろう。

さて、どうするよ？

転生者君？

Sideカイン

痛みで思考ができない。

またか？

また私は弱者なのか？

あの時と同じように、また私は死ぬのか？

第二の人生は、素晴らしいものであると信じたのに、これがその終わりか？

嫌だ！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!!

私が神に望んだものは、素晴しき第二の人生。
しかし、それを阻むものは必ず現れると思い、手にした能力。
それすらも通用しないのか。

いや、まだだ！

まだ最後の一つが残っている！

私の身体は既に死に体！

これなら必要条件を満たしている！

前世の死の間際、頭をよぎったあの願い。
その体現！

「アアアツツ！！混沌！お前も道連れだ！！」

「？！まだ何かあったのか？！」

今までずっと、余裕だった敵の顔が変わる。
ああ、その顔が見たかった。

「『偽り写し示す万象』ヴェルグ・アヴェスター！！！！！」

私の最後の望み。
それは

『奴らを道連れにしたかった』

だ。

創生の土。(後書き)

カインの起源は『報復』です。

しかし、それが表に出る前に死んだため、特典として表れました。

自殺にまで追い込まれた彼の『報復』は『道連れ』。

正直、現代の世界ではあまり珍しくない願いです。
非常に残念ながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7191x/>

魔法世界の混沌

2011年11月14日13時02分発行